

付せる寫本に示すが如き誤謬の存するものあり。〔編者云、右の碑文は原稿にて別紙を挿入する故寫本という〕

（此の寫本は Schlegel 氏の讀みたるものを其の儘に寫し、其の誤謬と思惟したるものは、黒字を以て右側に並記せり、Schlegel 氏の用ゐたる黒字は拓本に就きて疑無しと見たるものにして、朱字は氏が試に補ひたるものなり）〔編者云、原稿の朱字はここにては傍點を以て之を表わす〕

Schlegel 氏は多くの碑文の文字の缺けたる所を、意を以て補ひたりしが、此の如きは元來極めて危険なる企圖にして、意義相連続せる章句中の一字二字を補ふ程度に止まれる補填は、必ずしも困難ならざることあれど、多数の文字の缺けたる間に於けるかゝる試みは、寧ろ考へざるの甚しきものと曰はざる可らず、而して余輩の見たる拓本には、氏の讀み能はざりし字畫の、或は全部、或は半ば存残せるもの少からざるが、此等の文字を氏が填補したるものと比較するに、其の能く眞を得たるもの殆んど存する無し、假令ば

V 41 「得」とせるものは「是」か「見」かの字畫なること明らかなり。

VI 23 「邦」とせるものは「營」

VII 1 「便」とせるは「使」

VIII 50 「酪」とせるものは「野」

IX 42 「非」
〃
「事」

X 26 「聖」
〃
「在」

X 60 「道」
〃
「後」